

「分析をしているとき、ひとは退屈することを知りません。というのも何も準備することができないからです」

インタビュアー) 今日は。ポッドキャストへようこそ。プシのひとたちが自分の話を皆さんと分かち合う番組です。・・クロチルド・ルギルさんは、演劇、映画、哲学、そして精神分析への欲望を皆さんと分かち合うでしょう。

彼女は、愛、セクシャリティー、不安、欲望、欲動、そして享樂の問題について、方向づけることができる今日唯一のディスクールが精神分析かもしれないと、主張しています。

精神分析はそれらに関して、演奏すべき楽譜をもっているとのことです。

それではルギルさんのお話を伺ってみましょう。分析経験や職業的かつ女性、娘、母親としての個人的でもある色々な選択や欲望を、お伝えします。知と臨床のあいだを旅してみましよう。

あなたのことをお話ししに来てくださり、ありがとうございます。では最初に、自己紹介をお願いしますか？そして現在のあなたの活動を定義していただけますか？

ルギル) もちろんです。クロチルド・ルギルです。精神分析家です。パリ第8大学では教授として教えていて、作家もしています。10数年前から本を書いているからです。エッセイで、精神分析と哲学、映画や文学とを交差させたものです。

私が書くエッセイというのは、多くの場合飛翔の点、出発点が同時代的な疑問からとられています。今の時代のディスカールのなかで私の胸を打ったこととかです。それは私自身がそれによって理解したいためですし、また精神分析がもたらすことができる理解のなにかを、伝達したいためです。愛、セクシャリティー、文化のなかの居心地悪さ、同意—これは私の最新の本のテーマです—、それらについて、今の時代のディスカールのなかで何が問題になっているのかを、掴みたいと思つてのことです。

そうですね。私の人生は、知的で創造的、臨床的な活動という意味では豊かです。というのはそれらの異なる色々な実践のあいだで、動いているからです。

精神分析の臨床実践、教育の実践も私にはとても大切なものです。25歳から教えていて、もう長くなりますから。教えるのはとても好きです。それから書くことの実践も合わせて、三つの実践をぜんぶ組み合わせていますね。というのは学生たちとの仕事のわくでやっている研究からも、書くことをしています。それだけではなく、自分自身の精神分析の親密な経験や精神分析家としての実践からも、書くことをしています。

著書は非常に大変現代的なテーマ、同時に非常に厳密なテーマを扱っています。

インタビュアー) では、心理学や精神分析のことを最初に耳にしたときのことから、思い出せる初めてのときのことから、お話しをはじめていただけますか？

ルギル) 最初、となると、家族のなかで聞いたものですね。というのは母の本棚に精神分析の著作があって、フロイトのもあったし、ベッテルハイムもありました。あとフェミニストのものもありました。

いくらか気を引くものもありましたが、私は最初それらを見て、そこに本があるなと思いました。でもすぐには興味をもちませんでした。でも家で精神分析の話がされているのは聞いていましたね。

母は週に一度男性の分析家に会っていて、ですからそれは気を引きました。あと精神分析について話がされる世界にいたというのは、確かにラッキーなことだったと思います。

そしてより個人的な出会い、フロイトの本との出会いという点では、高校の最終学年のときです。哲学のクラスにいたのですが、フロイトの『夢解釈』にすぐに夢中になりました。父が誕生日にその本をプレゼントしてくれていました。だから17歳のときになりま

す。しかも父は娘になにをプレゼントしたらよいのか、ひとに助言をもらいに行っていたのです。フランス大学出版の図書館にいて、当時それはソルボンヌ広場にありました。それで私はその本をプレゼントとして受け取りました。

ですので『夢解釈』がフロイトで読んだ最初の本になります。17歳の子にとっては、難しいフロイトの本です。でも私はすべて読みとおしました。そして夢中になりました。もちろんすべて理解できたのではありませんけれども。

夢に関して、夢中になったものがあります。それはフロイトが「心的リアリティー」と呼んでいるものと、夢が関連があるのだということです。すぐに私は「心的リアリティー」って何だろう？このリアリティーはどんな規定をもっているのだろうと、疑問に思いました。

あと、「存在(実存) existence のリアリティー」との関連では、どのような関連が「心的リアリティー」にあるのだろうか？とも思いました。

で結局は、この最初の問いがたぶん私が哲学の研究をしているあいだずっと、地下に脈々と存在していたと思います。『夢の解釈』を読んで考えた問いでしたが。そしてとりわけその後、精神分析によって私は自分を形成することにもつながりました。哲学の博士課程をやって、そのテーマはラカンとサルトルの関連についてでした。ですから精神分析と

哲学における、真理と現実界のあらゆる問いにも、関連していました。

そういうわけで、フロイトのこの夢解釈というテキストを高校の哲学の先生のおかげで最終学年のときに発見しました。彼はこの本について語っていて、というのはフランスでは、結局今までのところ、無意識は教科のプログラムに載っている概念に属しているし、フロイトもその作家たちの一部に属しているのは本当だからです。フロイトは哲学者ではないけれども、精神分析家は最終学年で学ぶ作家のひとりなのです。

それは真の出会いでした。哲学のディスクール以外の、ひとつのディスクールとの出会いでした。そのあと私はイポキヤニューとキヤニューの文学の予備クラスをやって、フェヌロン高等学校のキヤニューの哲学の先生、ピエール・レイモンド氏はルイ・アルチュセールの弟子でした。アルチュセールは時々ラカンのことを言及していましたが、そこでも同じでした。

私たち生徒は何が問題になっているのかつねに理解できるわけではありませんでした。でもある日のことを良く覚えています。先生が黒板に書いていて、信仰の問いについて勉強しなければならなかったのですが、彼は黒板に「父の名」と書いたのです。それも彼は、ラカンが書いたように、書いたのです。「les non dupes errent (馬鹿でない者は彷徨う)」と。それが私の気を引きました。それが最初に精神分析に興味をもったときだと思いま

す。

それと同時に、イポキヤーニュではすでに、べつの哲学の先生が、私たちに哲学における自我の問いを勉強させていて、それでパスカルのことをよく勉強しました。それから彼はラカンの2巻のひとつの章を読ませました。ラカンがロッシュフーコーとパスカルについて話している箇所です。

思い出すが、じつは私はただちに「ラカンが自我について言っていることは素晴らしい」と思ったのです。「自我」と「主体」のこの区別はその後私が博士論文で研究したものです。すぐにそれは私に訴えてきたのです。

インタビュアー) ですから分析、精神分析の次元のなにかに接近できたような、家庭環境があったのですね。そしてあなたは高校の最終学年でフロイトのテキストに出会い、そのプレゼントはむしろあなたを哲学の方向へと、導いたのですよね。

ルギル) そうです。つまり私は精神分析のほうへ自分が導かれていくとは、思っていませんでした。というのは、実のところ、哲学に夢中だったからなのです。フロイトのテキス

トは哲学のクラスでも発見していましたが。私が最終学年で理系のほうにいればいるほど、哲学にひかれたのです。理系の勉強をすればするほど、道を間違えた気が付きました。そしてより道を間違えれば間違えるほど、じつは自分がしたかったことが、文学と哲学だったと分かったのです。

インタビュアー) あなたの頭のなかでははっきりとした考え、つまり教育者になるために哲学を選ぶという考えがありましたか？

ルギル) いいえ。まだそういう考えはありませんでした。私は当時はなにか書きたいと思っていて、興味があったのは、時代について考える、ということでした。

それは時代を解釈してみたい、ということでした。そのことを私は哲学のなかに見出したので、興味がひかれて、そしてそのあと哲学の研究をしたわけです。ENSに入学して、哲学教授資格をとりました。でもこの時まさに、哲学に対してちょっと混乱した、失望した時が訪れました。哲学にすごく夢中だったとしても、やはり私はそういう状態になってしまったのです。そして最終的にこの時は、ひとつの危機のかたちをとり、知的な形成における危機、でしたね。もちろんそれは親密な要素と関連があるようなものですが。でも最終的には幸運だったと思います。この危機を私は乗り切って、少し、「意味の危機」でもあるような危機を乗り切ったからです。哲学の知は本当に私が待ち望んでいたものなの

か。それは本当に当時私を揺さぶっていた問いに答えるのだろうか。何かがある、現実界の一部分がわきに置かれたままである、と、私は思いました。理論的な知の次元に最終的に属するような何かがあると。私にとってそれは特に、女性性の問いをめぐっているもので、愛の問題が脇に置かれたままに提示されていました。それは大変興味をひく問いでした。

インタビュアー) このときすでに、あなたにとってとても重要なテーマが出てきたのですね。

ルギル) そうです。とても重要なテーマが出てきて、かつ親密性の領域に属するであろう、あらゆるものも、出てきました。

・・・そうですね。ですからこの危機を、たくさんのことに取り組みながら、そうすることで乗り越えたと思います。というのは、危機を乗り越えるときの、私のやり方のひとつがそれだからです。私は教えていましたし、同時に演劇についても研究していました。そんなふうに、私はべつの場所、テキストとべつの関係をもつことを、探していたのですね。

それからその時まさに私は自分の分析を始めました。実はその時、私は24歳でしたが、

自らが経験するものとしての精神分析と出会ったというわけです。

インタビュアー) 演劇と、となりにある多くのものあいだに、とても創造的な何かがありました。理解できません。そしてあなた自身の分析は、哲学へと向かう研究の方向性に疑いを差し挟むものだったのでしょうか？それともその前からすでに、あなたはプシの方へ旅立たなければならないだろうと、思っていたのでしょうか？

ルギル) そうですね。まずそれは哲学の教授資格のあと、私を待っていた道というか、そういう感覚を私はもったと思っています。哲学博士をとって、ENSを卒業して、そのあと大学的な研究に登録して研究を続けました。

私は、自分にとって何かすごく早すぎるものがあるなと感じていました。研究のなかで知的な形成ということに当時もたらずことが何もないと言うか。たぶん私は十分に成熟していないなど、大事なはずの理論的な何かを、本当にはもたらずことができないような、そういうふう感じていました。

特に知との関連を探求したいと感じていたのです。それは、何年も研究したり試験をすで

に経て卒業するとき提案される知よりも、生き生きとした何かです。すでに若い頃の人生の一部分を、試験に通うことや読むことに捧げていたので、私はそう感じました。私はたくさん読みましたし、より生き生きとした関連、より身体的な、伝達することへの関連を求めていました。

ですから私は演劇に導かれました。演劇は3年間、パリ5区のコンセルバトワールにいて、そこで「群のスピリット」というものに出会いました。私はとても演劇を愛していたので、その演劇の道が続けるかどうかという問いを一時もったこともあるくらいなのです。でも同時に、私は知とか、知的な生活に非常にこだわってもしました。実のところ、ある期間、私は哲学の教育も担当していました。ですから私の博士論文はやらないで、哲学を高校で教えに行ったのです。

私は高校で哲学を教えるのが大好きでしたよ。同時に、演劇をやり、自分の分析も始めたというわけなのです。

しかしとりわけ起きたことは、私にとって、精神分析との出会いは、自分の人生のある時に課せられたものであるということです。その時期とは、つまり試練の時期でした。

というのは、ひとが分析を始めるのは、結局のところ、試練を生きているからで、その試練をどう乗り越えたらよいのか分からないからです。そしてそれは喪の試練であり、ある

近親者の喪失という試練でした。

それは本当に、真に実存的な、生命的な試練との出会いの時でした。私にとって寄る辺ない時でもありました。その時も勿論私は、生き続け、たくさんのかかり組んでもいました。でもそこには真の「ひび割れ」が存在していて、実のところ、そのために私は分析を始めたのです。そして本当に分析のおかげで私は、研究生生活のあと「少し故障している」と自分のことを思っていたところから、跳躍することができたのです。

そうですね。何かが存在しました。どの方向へ進むのかがちょっと分からない時というか。どこに私の欲望があるのか、もう分からない時というか。実際そうでしたね。そして欲望と知的な生活についての問いを同時に立てた、あの時というのは。知的な生活に憧れましたが、本当にどの方向へ行ったらいいのかという・・・。

同時に、私という存在の土台を根底から覆しにきた、人生の試練もありました。それこそまさに、分析経験に入ることを必要にした真の時でした。それで私は24歳のときに、分析を始めたのです。

まず私はひとつの分析をしたのですが、じつは私はとてもとても長いあいだ、分析をしました。最初フロイト派の分析家と5年間分析して、そうですね、あの切迫した時にずいぶ

ん助けてくれたと思います。

その次に、ラカン派の分析に出会いました。新たに、理論的な出会いのおかげで一というおのは、私はパリ第8大学の精神分析学部と出会って、討論をしに行っていたからです。つまりそれが、私が精神分析を本当に選んだ時でした。私は演劇をやめて、哲学を教えることを続けました。そして精神分析を選んだのです。つまり、知への嗜好を本当に再度与えてくれたのは、分析経験自体によるものでした。

インタビュアー) そうです。さきほどあなたは何か生き生きとしたものについて話していました。それこそまさに、分析があなたに体験させたものです。

ルギル) そう、そうです。まさに私が喪失と出会ったことに捕らわれていたときに、何かがあります。そうですね、それは本当にパロールの経験、結局分析の経験です。そのおかげで、私の欲望を再び見出して、欲望の方へと進むことが出来ました。

インタビュアー) 書籍や研究のなかにあるものではない知であって、まさにあなたに関係

しているある何か、ですね。

ルギル) そう、そうです。私は知と別の関係を見つける必要がありました。何かをもたらしてくれるようなものを、まさに死との出会いというあの現実界との関連で、つける必要がありました。そして最終的には愛についての問い立てとの関連でも、つける必要がありました。というのは、こういう次元もあるのです。それは私を苦しめるような次元です。実はただ経験としての精神分析だけが、それも本当に主体的な経験、運命において不透明でありうるもの全てのものの探求としての精神分析だけが、私にとっては知との新しい関係へと導いてくれるものだったのです。それは本当に生命の側に存在しているものでした。(つづく)